

アリソン・アトリー『時の旅人』を読む —タイムファンタジーのもたらす時間意識の変容—

川越 ゆり

この小論は、アリソン・アトリー（Alison Uttley）が1939年に著した『時の旅人』（*A Traveller in Time*）における主人公の時間体験を分析することで、作品の特性を引き出し、タイムファンタジーの可能性を探る一助とすることを目的にしている。1.では、舞台となる荘園館、サッカーズ農園（Thackers Farm）が、その土地に何百年も生き続け、人間の悲喜劇を見てきた記憶をもつものとして描かれていることを述べ、主人公、ペネロピー（Penelope）のタイムトラベルが、直線的な時間線をさかのぼって着く過去ではなく、農園屋敷の記憶の中の時間であることを述べる。2.では、サッカーズ農園とその内部にあふれる古い家財道具が、過去の物語をもって存在するというスタンスで描かれていること、それらの声なき声を察知するペネロピーの資質がタイムトラベルを可能にしたことを述べ、本作品のタイムトラベルが〈物語を語る・聴く〉という行為を原型にしていることを述べる。3.では、エリアーデの「聖なる時間」論を援用しつつ、ペネロピーの体験する時間が、農園屋敷の回想や土地の人々の語りの中で再現可能な時間、移り変わらない、永遠の無時間であることを述べる。4.では、タイムトラベルを通してバビントン一族が属する時間と絆を深めたことで、ペネロピーの中の直線的な時間意識が揺らぎ、それが、現実の変容と、〈一回性の生を終えて消滅する私〉から〈個を超えて連続する私〉という新たなアイデンティティの獲得につながることを述べ、まとめとする。

はじめに

『時の旅人』（*A Traveller in Time*）は、アリソン・アトリー（Alison Uttley 1884-1976）が1939年に著したタイムファンタジーである。

アトリーは、イギリスはダービーシャー（Derbyshire）の農場で子ども時代を過ごした。生家の近くには、「バビントンの陰謀」の首謀者として歴史に名の残る、アンソニー・バビントン（Anthony Babington 1561-1586）の荘園館があった。アンソニー・バビントンは、イエズス会を支持する秘密結社に属し、スコットランドのメアリー女王を監禁から解放する謀反を企てた罪で、エリザベス女王に処刑された人物である。

「まえがき」(Foreword)によれば、子ども時代のアトリーは、数百年前にバビントン一族が住んでいた荘園館を眺めながら遊び、父親の語る一族の悲劇をくり返し聴いて育ったという。彼らの物語がよほど強く印象に残ったのだろう、アトリーは、夢の中で16世紀を訪れ、バビントン一族に会ったと回想している。このような子ども時代の環境が、アトリーの中に、現在と同時に生きられている過去、という独特の時間感覚を育んだらうことは想像に難くない。その思い出は、後年、16世紀にタイムトラベルし、バビントン一族に出会う少女、ペネロピー・タバナー・キャメロン(Penelope Taberner Cameron)の物語として結実したのだった。

『時の旅人』は、マーガレット・マーヒー(Margaret Mahy)やマーカス・クラウチ(Marcus Crouch)などの著名な児童文学作家や批評家たちに高く評される一方で¹⁾、ネズビット(E. Nesbit)の伝統を汲むタイムファンタジー群のひとつとしてイギリス児童文学史に取り上げられることはあっても、作品論として十分に研究されているとは言いがたい。しかしながら、この作品における主人公の時間体験について考察することは、タイムファンタジーに描かれる時間の諸相を探る際にも、非常に有効と思われる。

トールキン(Tolkien, J.R.R.)は、ファンタジーが人間に根源的な欲求、“[the desire] to survey the depth of space and time”(34-35)を満足させると述べた。過去にさかのぼるタイプのタイムファンタジーは、時間の不可逆性の克服を等しく前提としている。もっとも、後述するように、ペネロピーは時間の流れをさかのぼって過去に行くのではない。彼女が旅するのは、直線的な時間線を逆行した先にある過去ではなく、時計では計測不可能な無時間、通常の時間の外側である。

本稿は、ペネロピーの時間体験の本質と、それがもたらす現実世界の変容や新たなアイデンティティの獲得について分析・考察することで、作品の特性を引き出すことを目的とする。同時に、それは、タイムファンタジーというジャンルの可能性を探る、ささやかな試みにもなるだろう。

1. 今なお生きられている過去

ロンドンに家族と住むペネロピーは、病氣療養のためにダービーシャーで農園を営むバーナバスおじ(Uncle Barnabas)とティッシーおば(Aunt Tissie)に預けられることになる。二人の住むサッカーズ農園(Thackers Farm)は、もともとは荘園領主、アンソンニー・バビントンが16世紀に建てた荘園館であり、おじたちの祖先は一族の使用人であった。

ある日、用事を頼まれて2階に上がったペネロピーは、ドレス姿の貴婦人たちがゲームに興じる姿を見て驚くが、ティッシーの呼び声に我に返ると、その光景はあとかたもなく消えている。それをきっかけに、ペネロピーは屋敷の中に現れる過去の世界にタイムトラベルするようになり、悲劇の起こる数年前のバビントン家の人々や、一族の台所長で、自分の祖先でもあるシスリーおば(Aunt Cicely)らと交流を深めていく。

この作品では、主人公が過去の世界に行くのに、タイムマシンのような装置や何らかの手続きを必要としない。ペネロピーが屋敷の部屋のドアを開けると、突然、ある

はずのない廊下が伸びており、盆をもった女中が歩いている。あるいは、ポーチから台所に戻ると、いつのまにかそこは過去のサッカーズの台所になっている。バーナバスおじと庭の木陰で休憩していると、炉の火に照らされながら台所で働く16世紀の人々の姿が見え、また、消えていく。以下の場面のように、過去の世界は、現在の農園屋敷の中から不意にペネロピーの前に現れる。

One day I [Penelope] stood on the landing, and I saw the iron latchet and the dark outline of the lost door. A sudden stillness came over the little sounds of the house, I felt strangely light as if I were treading on air. Walls disappeared or stretched out before me in the gable of Thackers. I lifted the latch and stepped down the little stairway into the corridor of time. It was quiet in the passage and I tiptoed along it, but my feet made no sound. Gradually I became accustomed to other scents and the atmosphere of the other time. (95-96)

サッカーズ農園の中では、現在とバビントン一族の生きていた数百年前の時間が混在し、過去は現在の中から気まぐれに顔を出しては消えてゆく。それはくすでに消滅した過去ではなく、〈今なお生きられている過去〉である。16世紀の世界へタイムトラベルをくり返すうちに、ペネロピーは現在のすぐ隣りで生きている一族を、“the tragedy going on at the same time in the unseen part of the house” (276) を、実感するようになる。

ところで、〈今なお生きられている過去〉は、私たちの日常でも〈回想〉という形でしばしば体験される。ひょんなことからある記憶がよみがえり、その回想にふけるとき、過去の時間は現在と同時進行で生きられている。記憶の中の時間の密度は濃く、長々と思いに浸っていたつもりが、実際にはほんの数分しかたっていないということも少なくない。我に返り、意識が現実に戻ると、記憶の映像はまた心の底に沈んでいく。

ペネロピーがタイムトラベルする過去も、時間線をさかのぼって行く過去ではなく、回想された過去の時間と質を同じにしている。現在のサッカーズ農園の中から不意に顔を出し、不意に消えてしまう過去の世界は、まるで誰かの記憶の中から浮かびあがった心象風景のようである。では、それは誰の記憶なのか。

同じモチーフはアトリーの他作品にも見られるが²、“The air of house and barn [of Thackers] was throbbing with memory of things once seen and heard” (139) などの描写が示すように、この作品では、サッカーズ農園屋敷が、数百年ものタイムスパンで生き続けて人々の悲喜劇を目撃し、その記憶をもつものとして描かれている。その超人的な長さの記憶の中で、とりわけ強烈な刻印を残しているのは、バビントン一族の悲劇だろう。現在のサッカーズ農園には、遙か昔に生きた一族の気配が色濃く漂っており、感受性の鋭いペネロピーは、それを敏感に察知する。この作品が、“a story to be read slowly and savored” (Bigelow 154) ³と評される所以も、この種の気配にあるだろう。

哲学者の多木浩二は、『生きられた家 経験と象徴』の中で、古い家屋が「多様な時間の結果」であり、「家そのものが記憶」であると述べているが(211)、記憶のイメージとしてのサッカーズ農園が、ペネロピーのタイムトラベルの中心にある。屋敷内に

浮かび上がる過去の風景は、一族の回想にふけるサッカーズ農園の記憶の中のそれであり、ペネロピーは、人の寿命を遥かに越えて生きる屋敷の記憶を旅する。

2. <タイムトラベルすること>と<物語を語る・聴くこと>

この作品では、サッカーズ農園のみならず、土地の豊かな自然も、超人的な記憶を有するものとして描かれている。何世紀もの間、サッカーズとその周辺の人々の生と死を見つめてきたイチイの枝には“the essence of sorrow” (173) が宿っている。

数百年単位でサッカーズに生き、そこで起きた出来事の記憶をもつ農園屋敷や自然は、土地の<物語>を秘めて存在すると言い換えられるだろう。同様のことは、屋敷内に多々見られる古い家具や道具についてもいえる。サッカーズには、現在の家主たちですらいつ頃からあるのかわからない、古い台所用品や家財道具であふれており、それらはそれぞれに小さな物語を秘めている。針箱に小さな木彫りの人形（16世紀の世界で、ペネロピーは同じ人形を見る）を見つけたペネロピーに、ティッシーはこう言う。

‘It was lost for years,’ continued Aunt Tissie, as she peered with screwed-up eyes at the wooden man, ‘and we found it again in some rubbish in one of the attics. Then once it got throwed on the fire, and I got it off just as it began to burn. Another time it lay in the yard, and the cattle trod on it, so you see it could tell us some tales if it could spear.’ (50)

ティッシーと同じようなセリフは、過去の世界でシスリーの口からも語られる。“We’m got many an aged thing kept from days long past, and if they could speak they’d have perilous tales to tell.” (68)

現在のサッカーズ農園は、古い調度品が声なき声で語る物語で充満しているが、それに気づくのはペネロピーのみである。彼女は、ロンドンの家でも、祖母の衣装箱に入った衣服や装飾品について語る声が聞こえるように思い、それらを物語にして姉弟に語るような少女である。この作品におけるタイムトラベルは、装置や手続きを踏めば誰にでも可能というわけではなく、主人公の語り手的な資質が密に関わっている。古いものたちの声なき声を感じ取る資質が、ペネロピーのタイムトラベルを可能にしたといえるだろう。

作品中で、ペネロピーは現在と過去のサッカーズを何度か往復する。過去の世界でバビントン一族との交流を深める一方で、彼女は、現在の農園で、一族や自分たちタバナー家の祖先の話を聴く⁴。バビントン一族のエピソードをつい最近の出来事のように話すティッシーの語り口に表れているように、彼らの悲劇は、サッカーズで何代にも渡って語られてきた土地の伝説でもある。その意味で、ペネロピーのタイムトラベルは、個を超えて、サッカーズの土地で連綿と共有されてきた集団的記憶の中に生きる経験とも解釈できる。

農園屋敷にあふれる古いものたちの声を察知することや、おばの語る一族の物語を聴くこともまた、過去の時間に生きる経験といえるだろう。<タイムトラベルするこ

と>と<物語を語る・聴くこと>が、この作品では本質的に同義として置かれている。<物語を語る・聴く>という、ドメスティックで素朴な経験が、ペネロピーのタイムトラベルの原型になっているのである。

3. <永遠の現在>を生きる

では、ペネロピーはタイムトラベルを通してどのような時間体験をしたのだろうか。ペネロピーが過去の旅から現在に戻っても、時計の針は全く進んでいない。バビントン一族やメアリー女王は、直線的に進む日常の時間とは異なる時間、時計では計測不可能な時間に生きている。

本書の冒頭に置かれた“Time is / Time was / Time is not”（「時あり 時ありき 時あらず」）という言葉は、現在が過ぎて過去になっていく流れる時間の傍らに、移り変わらない無時間があることを示しているが、史実上の人物を超え、今や土地の伝説の中に生きるバビントン一族は、「時あらず」の時間に属している⁵。ペネロピーがタイムトラベルをした先は、“that hidden timeless world where the hours and seconds were crystallized into one transparent drop, round and clear”（91）、すなわち、結晶化して流れない、永遠の現在とでもいうべき時間なのである。

そのように考えれば、『時の旅人』は、タイムトラベルした主人公が過去の出来事に積極的に関与し、史実を変えるタイプの作品とは一線を画している。ペネロピーは、一族の結末を史実として知っているが、彼らと共に過ごす永遠の現在の中では、その知識はほんやりとしか浮かばず、彼らの悲劇を未然に防ぐことはできない。彼女のタイムトラベルが、本質的に不変の時間の上に成立することを思えば、それも当然だろう。

興味深いことに、ペネロピーが旅する“that hidden timeless world”の時間は、エリアーデ（Mircea Eliade）の「聖なる時間」論にも通底しているように思われる。『聖なる空間と時間』の中で、エリアーデは、日常に流れる不可逆的な「俗的時間」と、その中に入り込む、可逆的で回復可能な「聖なる時間」について言及し、後者が宗教儀礼などに顕著にあらわれると述べている。

儀礼は全て、今、この瞬間におこなわれる、という特質をもっている。その儀礼によって出来事が記念され、くりかえされる際の時間は現在化され、たとえその時間がいかに遠い過去と考えられても、それはいわば「再=現」représenteされるのである。キリストの受難と死と復活は、単に聖週（復活祭前の週）の祭式によって記念されるだけでなく、それらはその時、実際に、信徒の前で起こるのである。真のキリスト教徒は、自分がこうした超歴史的な出来事の同時代人であると感じなければならない。（94）

周期的ではないが、バビントン一族らが属する無時間の世界は、サッカーズの農園屋敷が彼らを回想するたびに（あるいは、何世代にも渡って土地の人々に語られるたびに）、その時々<今、ここ>にくり返しよみがえる。ペネロピーは、一族やメアリー女王らとともに、回復可能で可逆的な不変の時間を生きる。

その時間体験が、作品中でもっとも奇跡的に描かれているのは、クライマックスの場面だろう。過去の世界でクリスマスイヴを迎えたペネロピーが、台所で祝宴の準備に追われているところに、エリザベス女王の探索隊がサッカーズに向かっているという悪い知らせが届く。メアリー女王の逃亡用に秘密裏に掘らせていたサッカーズの地下通路が露見すれば、アンソニーの命はない。ペネロピーは、神に祈るような気持ちでポーチに出る。

The stars slowly faded as I [Penelope] stood there, the brightness was dimmed, a cloud seemed to move over the surface of the heavens and an icy stillness made me shiver with apprehension. Then there was a sound, so faint that I felt it with my own extreme consciousness, a movement as the earth listened also. A few feathers of snow shimmered through the air, then more and more, great flakes came fluttering down, caught in their beauty by the light from an unshuttered window, heralding a snowstorm. (270-271)

雪のひとひらはやがて嵐となって通路を掘った痕跡をきれいに消し去り、一族はきわどいところで危険を逃れる。仮装芝居の一団が莊園館を訪れ、みなは喜びに包まれて、ひときわにぎやかにクリスマスを祝う。クリスマスイヴに起きた、神のご加護としか言いようのない奇蹟の瞬間を、ペネロピーはバビントン一族の「同時代人」として共有する。

4. <一回性の生を終えて消滅する私>から<個を超えて連続する私>へ

タイムトラベルをくり返すうちに、ペネロピーの現実はより豊かなものとして変容する。彼女の中で優位に立っていた、直線的に流れる移り変わる時間は次第に退き、バビントン一族らの属する、移り変わらない永遠の時間が前面に出るようになる。現在のサッカーズに戻っても、彼女はその時間を強く意識するようになる。

‘Here’s a sup that will do you good and make you sleep,’ said she [Aunt Tissie]. ‘We always have done, right-away back.’ I [Penelope] tasted the honey and balm, and I thought of the herb posset I had seen Aunt Cicely make for Mistress Babington. It had the same sweet smell, and as Aunt Tissie leaned over to kiss me, there seemed little difference, so that I scarcely knew in which time I was living. Or Was it that time never existed, that we all lived between two worlds which I had been privileged to enter? (92)

ティッシーの淹れたハーブティーからは、バビントンの奥方のために作られたポセットと同じ甘い香りがたちのぼる⁶。シスリーとティッシーの仕草のあまりの似た様子に、ペネロピーは、一瞬、自分がどちらの時間にいるのかわからなくなる。数百年の時を経ても、現在と過去のサッカーズでは同じ光景がくり返され、二人のおばは、個の人生を生きながらも、タバナー家の祖型の再現である。

二つの時間の往還を通して現在のサッカーズを改めて眺めたとき、時計で測れる直線的な時間の中に、移り変わることはない時間、その土地でくり返し再現されてきたもうひとつの時間を内包した世界が立ち現れる。そこでは、人々もまた、一度限りの個の時間を超えて、四季のめぐりのようくり返される時間に包まれている。

ペネロピーの現実の変容について考える際に、真木悠介の以下の論は示唆に富むものである。真木は、『時間の比較社会学』の中で、前掲のエリアーデの「聖なる時間」論が「時間の廃棄、＜時間のない時間＞であることをこそ本質にする」（58）と述べ、それがアメリカやオーストラリア、アフリカなどの原始共同体の言語や生活習慣の根底にある時間意識と共通すると指摘する⁷。さらに、直線的で有限の時間意識が優位な私たち近代人がつくる世界像と、原始人のそれとの違いについて、以下のように述べている。

原始人も近代人も、ともにこの現実世界が、くりかえすものと一回的なもの、可逆的なものと不可逆的なもの、恒常的なものとうつりゆくものとの両方から成ることを知っている。つまり当然、両者はおなじ外界の世界をみている。けれどもそこから、両者はまったく異なった「世界」の像をつくる。原始人にとって意味があるのは、くりかえすもの、可逆的なもの、恒常的なものであり、一回的なもの、不可逆的なもの、うつりゆくものはその素材にすぎない。近代人にとっては逆に、くりかえすもの、可逆的なものの方が背景となる枠組みをなして、この地の上に、一回的なもの、不可逆的なものとしての人生と歴史が展開する。（62）

現実が正反対の二つの要素で構成されている点は同じでも、どちらに重きを置くかで世界像は対照的なものになる、という真木の指摘は興味深い。タイムトラベルを通してペネロピーが体験するのは、「一回的なもの、不可逆的なもの、うつりゆくもの」として定着した時間意識の揺らぎと、「くりかえすもの、可逆的なもの、恒常的なもの」としての時間意識の強化がもたらす現実の変容だからである。

ペネロピーが16世紀を訪れるたびに、過去を消滅させて進む一回性の時間は中断され、サッカーズ農園の記憶の中で（あるいは、土地の人々による一族の悲劇の語りの中で）何世紀にも渡ってくり返し再現されてきた無時間的な永遠が生きられる。その結果、ペネロピーの現実には新たな枠組みをもつものとして変容する。

それはまた、新たなアイデンティティの獲得にもつながる。終盤に近づくにつれて、ペネロピーは過去の世界と接触できなくなっていく。終章では、ペネロピーの家族がクリスマスを祝うためにサッカーズ農園を訪れる。母が見つけた古いパッチワークキルトの端切れの中に、ペネロピーは、バビントンの奥方が刺繍した布があることに気づく。

家族は、その布が極めて古いアンティークで、何十年もの間、ティッシーの祖母の裁縫箱に入っていたということしかわからない。300年以上も前に奥方の白い指が刺繍している姿を見たという記憶、今となってはサッカーズ農園屋敷しか知らない記憶を、ペネロピーは我がものとする。農園屋敷の超人的な記憶を旅し、バビントン一族の生きる時間と絆を深めたことで、ペネロピーは一個人の人生を遥かに超える長さの視点、人の一生を眺める超越的な視点を獲得するのである。

結局、ペネロピーは、一族の悲劇を最後まで見届けることなく過去への旅を終える。

現在のサッカーズ農園から、彼女は幾度となく往還をくり返した過去の時間と、そこで出会った人々に思いを馳せる。

The peacefulness of Thackers which had held the seasons for five hundred years flowed through me, giving me strength and courage as it had done to those others, uniting me to them. I knew I had seen them for the last time on this earth, but some day I shall return to be with that brave company of shadows. (285)

ペネロピーのタイムトラベル、それは異質な二つの時間の往還を通して、自己の全体性を回復する旅だったのではないだろうか。彼女は、直線的で有限の時間のすぐ隣りに、バビントン一族らの生きる永遠の無時間があること、現在がその大きな時間に包み込まれていることを知る。そのとき、自分という存在は、＜一回性の生を終えて消滅する私＞から、＜個を超えて連続する私＞として開かれる。ペネロピーはペネロピーであると同時に、シスリーであり、ティッシーでもある。

結びに

＜個を超えて連続する私＞という新たなアイデンティティを獲得し、自己の全体性が回復された結果、ペネロピーの現実には再編成され、彼女に（そして、読者にも）生きる上での“strength and courage”を与える。

『時の旅人』は、タイムトラベルの手法で、「時間・空間を脱構築する文学」（井辻176）としてのファンタジーの可能性を示している。ペネロピーの時間体験は、空間や時間の制約を超えたいという人間に普遍的な欲求を満たすのみならず、有限で直線的な現代人の時間意識を揺さぶり、「＜時間の中で現実はずぎつぎと無になってゆく＞という」（真木 7）時間観がもたらす深い孤独を癒す効果がある。その意味で、この作品の今日的な意義は十分にあるだろう。

なお、今後は、他のタイムファンタジーや、幽霊物語という手法で『時の旅人』と共通するテーマを描いた、ルーシー・ボストン（Lucy Boston）の『グリーンノウの子どもたち』（*The Children of Green Knowe*）⁸との比較を通して、ファンタジーにおける時間体験をさらに広く考察することを課題としたい。

註

¹ 本論で使用したテキストには、冒頭に、マーヒー（Margaret Mahy）の寄稿が置かれており、『時の旅人』が子ども時代からの愛読書だったことなどが述べられている。クラウチ（Marcus Crouch）については、*The Nesbit Tradition: Children's Novel, 1945-70*を参照。

² 超越的な記憶をもつものとしての自然や古い屋敷のモチーフは、アトリーの自伝的小説、*The Country Child*（1931）や短編作品にも見られる。短編、“The Keys

of the Trees”（1944）には、主人公の少年ジョン（John）が、西風にもらった鍵で櫛の木の扉を開け、その心をのぞく場面がある。扉の中には、何百年も前に街道を通った騎士や修道士やブタ飼いたちの姿が浮かび（ここはサッカーズ農園屋敷の中に浮かぶ過去の風景と非常に似ている）、櫛の木が五百年前に見た光景の思い出にふけていることを知ったジョンは、“I knew why the oak is such a mighty tree. It is because it has lived for so long and remembered the past.”（129）と言う。以下の櫛の木の描写はそのままサッカーズ農園にもあてはまるだろう。“The tree gazed along the broad roads, to north, south, east, and west, watching the traffic of town and country, but all the time dreaming in its heart of the days of its youth five-hundred years ago.”（129）

- ³ 原典は、Therese Bigelow, “Review of A Traveller in Time”, *School Library Journal*, October, 1981だが、入手困難のため、Hile, ed, *Something about the Author: Facts and Pictures about Authors and Illustrators of Books for Young People* Volume 88に拠った。
- ⁴ 本作品の冒頭で、アトリーは、父親がバビントン一族の物語を語る時、まるで昨日起きた出来事のように語ったと回想している。語り手としてのティッシーには、作者自身の父親の姿が投影されている。
- ⁵ メアリー女王についての “She [the Queen of Scots] was alive, she was dead, and always she was immortal”（106）というくだりも、“Time is / Time was / Time is not” と同じことを指していると解釈できる。
- ⁶ この他にも、二つの時間をつなぐのに、ハーブや干し草などの＜香りのイメージ＞は作品中で重要な役割を果たしている。
- ⁷ 真木はその一例として、レヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss）を引きつつ、オーストラリア原住民の生活文化に見られる「チューリング」（記号の刻まれた石ころや木片）を挙げている。チューリングは先祖の身体を表し、持ち主は、自分がその先祖の生まれかわりと信じて、チューリングを大事に扱い、定期的に入入れを施したり祈りを捧げたりするという。チューリングは、与えられた者に「祖先から自我、そして子孫へと、再現する人間としての個我をこえたアイデンティティ」（24）を獲得させる役割を果たしているわけだが、そこにはたらく時間意識は、可逆的であり返し回復可能なそれといえる。詳細については『時間の比較社会学』の序章、第1章を参照されたい。
- ⁸ このファンタジーでは、主人公の少年が、12世紀に建てられた荘園館で、かつてそこに住んでいたきょうだいの幽霊に出会う。幽霊もまた＜今なお生きられている過去＞のイメージといえる。

引用・参考文献

- Boston, Lucy M. *The Children of Green Knowe*. 1954. London: Faber and Faber, 2000.
- Cameron, Eleanor. *The Seed and the Vision: On the Writing and Appreciation of Children's Books*. New York: Dutton Children's Books, 1994.

- Cosslett, Tess. “ ‘History from Below’ : Time-Slip Narratives and National Identity.”
The Lion and the Unicorn 26 (2002) : 243-253.
- Crouch, Marcus. *The Nesbit Tradition: Children’s Novel, 1945-70*. London: Earnest Benn, 1972.
- Hile, S. Kevin ed. *Something about the Author: Facts and Pictures about Authors and Illustrators of Books for Young People* Volume 88. Detroit: Gale Research, 1997.
- Tolkien, J.R.R. *Tolkien On Fairy-Stories*. 1947. London: HarperCollins, 2014.
- Uttley, Alison. *A Traveller in Time*. 1939. London: Jane Nissen Books, 2007.
- _____. *The Country Child*. 1931. London: Jane Nissen Books, 2000.
- _____. “The Keys of the Trees.” *The Spice Woman’s Basket and Other Tales*. London: Faber and Faber, 1944.
- ミルチャ・エリアーデ. 久米博訳. 『聖なる時間と空間』. せりか書房, 1974.
- ミルチャ・エリアーデ. 風間敏夫訳. 『聖と俗 宗教的なるものの本質について』. 法政大学出版局, 1969.
- 井辻朱美. 『ファンタジー万華鏡』. 研究社, 2005.
- 真木悠介. 『時間の比較社会学』. 1981. 岩波書店, 2003.
- 多木浩二. 『生きられた家 経験と象徴』. 1984. 岩波書店, 2001.
- アリソン・アトリー. 松野正子訳. 『時の旅人』. 岩波書店, 2009.